農産物直売所／農家の「本気」に出会う場所

谷口吉光（秋田県立大学）

今秋田県では農産物直売所がちょっとしたブームになっている。直売所とは農家が自分たちで育てた野菜や果物を売っている店だ。英語で「ファーマーズマーケット」（農家の店）ともいう。最近道の駅などでも見かけるから、愛好している方も多いだろう。

先週能代市で開かれていた種苗交換会の談話会で、この直売所がテーマに取り上げられた。談話会というのはその年のテーマについて 10 名の出席者が５時間かけて徹底的に議論を展開するという「マラソン討論会」のことで、種苗交換会のメイン行事と呼ばれている。私が今年の談話会の司会をしたが、とてもおもしろい議論だったので、この場で少し紹介させてもらうことにする。

まず、驚くのは直売所の数と規模だ。秋田県内には現在約 170 カ所の直売所があり、売上げは 24 億円にも上っている。24 億円がどのくらいの数字かといえば、秋田県の１年間の農産物総販売額は約 2000 億円だが、そのうち野菜と果物類は約 470 億円。24 億円はその５％に当たる金額だから、直売所はもう秋田県の農産物の立派な販売チャンネルのひとつになったといっていい。しかも、となりの青森県では直売所の売上げは秋田県の倍近い 46 億円、岩手県では秋田の４倍の 100 億円に達しているという。暗い話題が多い最近の農業のなかで、地産地消や直売所はほとんど唯一の明るい材料といっていい。農家が注目するのも当然だ。

もうひとつ直売所のおもしろさは、単なる物売りだけでないさまざまな活動をしているところだ。峰浜村にある「おらほの館」では店のお客さんを対象に農業実習と体験をさせる「おらほの学校」を開いているし、能代市の「みょうが館」では小中学校の社会科見学を受け入れている。大曲市の「菜・果・真」（な・か・ま）では近くの住民に生ごみを提供してもらい、農家と一緒に堆肥を作るという実験を始めている。

なぜ直売所でそんなことまでやっているのか。直売所の代表者が口をそろえていうのは「消費者や子供たちに農業のすばらしさを伝えたいから」ということだ。「秋田は農業県だ」といっても今や農家は少数派だ。農家人口は約 30 万人で、総人口の 26%でしかない。しかも高齢化は進み、後継者は少ない。しかし、危機感を持った農家のなかから、野菜を作り直売所を開く農家が出てきた。少数派の彼女らは消費者に向かって「農業のすばらしさを知ってほしい」「一緒に農業を支える仲間になってほしい」という熱烈なメッセージを送っているのだ。

個性のある直売所は野菜の栽培方法から包装、展示、品揃え、値段、店の飾り、レジでの応対に至るまで農家の思想（ポリシー）と想いが刻み込まれている。今度直売所に出かけたら、ぜひこうした農家の「本気」を感じてほしい。

（朝日新聞「あきた時評」　2003 年 11 月 15 日掲載分を加筆・修正した）